一字一筆

静岡の今 112

「けじめ」の成人式

着物姿で記念撮影する新成人たち＝静岡市・日本平山頂、全日写連・吉川正宏さん撮影

時の流れや人生には「けじめ」というものがある。新年は時の流れの中で最大のけじめであり、多くの人は初詣をして自身や家族の健康、幸せを祈る。ふだんは都会で暮らす世代や大学生の多くがふるさとに帰るのも、それぞれのけじめを求めているようにみえる。

その大切な暮らしや人生のリズムを、今年はコロナ禍がズタズタにした。県内各地の神社は「密防止」対策に追われ、外出自粛の風潮もあって初詣の客足を鈍らせた。「老人に感染させたくない」と帰省を控えた家族や大学生も多く、新幹線や高速道路の年末年始の風景を一変させた。

その中で、今年も1月の第2月曜日にあたる11日に「成人の日」を迎えた。「おとなになったことを自覚し、みずから生き抜こうとする青年を祝いはげます」（国民の祝日に関する法律第2条）ことを趣旨とし、各市町では毎年新成人を招いて成人式が行われる。

新春を告げる恒例行事をコロナ禍が襲った。県内最大（7647人）の新成人がいる浜松市は、首都圏からの直前帰省と2次会の自粛を呼びかけたうえで、市内38会場で分散実施。焼津市（1340人）では港の駐車場を使い、「ドライブイン方式」で行われた。

ふと、自身の「成人の日」が思い起こされた。60年前のその日、京都で大学2年生だった。下宿に近い史跡の詩仙堂に、一人で行った。「60年安保闘争」で騒然とした世相の中で、自分の生き方について考えてみたかった。

庭園に「鹿威し」として知られる「添水」がある。一定間隔で石を打つ竹筒の乾いた音が、今も耳朶に残っている。人生の大きな「けじめの日」であった。

今年県内の新成人は3万5694人。それぞれの「けじめの日」に、拍手を送りたい。

（前静岡県監査委員・富永久雄）